

No.112 真理と自由を求めて

大争闘上 16 章の要点

1. 教会の背教の第一歩

「こうしたことは良心の問題ではない、また、聖書に命じられていないから重要ではないが、それでも禁じられていないから本質的には悪ではない」という主張の危険。大争闘上 371

「大背教のまず第一歩は、教会の権威によって神の権威を補おうとしたことにあった。ローマは、神が禁じられなかったことをするように命じることから始まり、神が明らかに命じておられることを禁じるに至った。」大争闘上 372(下線部分は改訳)

● 教会の権威について

私は聖書と証し書の関係について今まで正しい表現をしてこなかった事を訂正させていただきます。それは次のようなことです。

「聖書と証の書は、同じ靈感によって書かれたもので、同等の権威を持つものである」という表現です。

しかし、次のように変えた方がいいと思います。

証の書は、聖書と全く同じ靈感を受けているが、やはり優先順位がある。我々の教会は、聖書、聖書だけを唯一の基準とする。証しの書の位置を、ユライヤ・スミスは次のようにたとえている。船主が航海に先立って、船長に地図を渡す。しかし、いよいよ目的地に着くとき、危険のために水先案内を用意しているのでその人の指図に従うようにと言いつつ、水先案内の権威に従わないと危険である。また、大統領と大使の関係にもたとえられるよう。大使の権威を拒むことは、大統領の権威を拒むことと同じである。預言者の権威を拒むことは、聖書を拒むことになる。歴代下 20:20 参照。

しかし、聖書と証の書の権威の代わりに「聖書と教会指針」の権威を掲げる傾向がないだろうか。教会指針は「神のみ言葉と個人の良心の権利に明らかに反するものでないならば」従うべきである。

「しかし神はこの地上に、聖書、そしてただ聖書だけをすべての教理の基準、すべての改革の基礎として保持する1つの民を、お持ちになるであろう。学識者の意見、科学の推論、教会会議の定めた信条や決議.....大衆の声、....それをもって信仰上の事柄に関する賛否の根拠と見なしてはならない。どんな教理や戒めでも、それを受け入れる前に、「主はこう言われる」という明日な事実をその裏づけとして要求すべきである。」大争闘下 360

17 世紀の初めにアメリカに渡った清教徒(ピューリタン)の精神

- ★ 良心の命じるところに従って神に仕える。
- ★ 宗教の自由—迫害と追放が自由への道を開くに至る。
- ★ ひるむことなく摂理の道に従って前進した。



2. ジョン・ロビンソンの告別説教：

改革の真の精神、プロテスタント主義の極めて重大な原則

「彼らに知らされた、あるいは、これから知らされるすべての神の道を共に歩く」ことを、一致団結して厳粛に誓った。ここに、改革の真の精神、プロテスタント主義の極めて重大な原則があった。彼らは、示される新しい真理を受け入れる用意ができていた。実物 105,6 必読。



●「神が禁じられなかった、聖書に命じられていないから本質的には悪ではない」

- ・安息日の午後に空き缶収集、掃除をして社会に奉仕
- ・女性牧師、長老、按手礼
- ・女性執事按手礼
- (2010 年アドベンチストライフ、9 月号参照)
- ・同性愛結婚の容認が SDA にも？

● ロビンソン牧師の説教を読まれたし。374 頁

- ・嘆かわしい教会の現状

・新しい光に前進せよ！

ローマ法王教の一大誤り：

「人間の良心を支配し、異端を定義し、処罰する権を、神は教会にゆだねられたという教義は、法王教の誤謬に最も深く根ざす誤りの一つである。

信教自由の闘士 ロジャー・ウィリアムス 376-

プロテスタントの迫害を受けて、政治の自由と宗教の自由を求めて逃亡する。彼を兄け入れたのはインディアンたちであった。

「わたしは十四週間の間、パンも寝るところもなく、厳寒の季節をあちこちと激しく逃げ回った」と彼は言っている。しかし、『荒野で、カラスがわたしを養ってくれ』そしてしばしば、木の幹の穴が彼の隠れ家となった。こうして彼は、雪と道のない森の中を苦勞して逃げて行き、ついに、インディアンの部族にかくまわれた。ここで彼は、彼らに福音の真理を教えながら、彼らの信頼と愛を勝ち得たのである。」 379

ロード・アイランドが最初の政治的宗教的自由の州となった。ここからバプテスマ教会が誕生したと言われている。

「礼拝や教会維持を強制されるべきではない」「人間は誰でも、自分の良心に従って、神より愛する自由を持つべきである」その原則がアメリカ共和国の礎石となった。

しかし、アメリカ合衆国のプロテスタント諸教会は、ロビンソンとロジャー・ウィリアムスが堂々と主張した大原則：

「真理は漸進的なものであって、キリスト者は神の聖書から輝き出る光をみな、いつでも信じる用意をしているべきである」382

ということを彼らの子孫たちは忘れていく。

今日のセブンスデー・アドベンチストに対するなんという警告であり、勧告であろう！

「しかし、新鮮な天からの光が人々に来るすべての通路を閉ざそうとする宗教的な教師たちが多くいる。彼らは、規則やきまりによって教会員をしばりつけ、他の礼拝の場所に行くこと、ある種の教師以外は、使命者たちに聞くことを禁じる。このようにして、男女は神が与えられた自由を放棄するように導かれる。そして知性を開発し、自分たちの教会以外の源から発せられる天来の光を集めることに失敗する」{ST, August 27, 1894}

「教会は、キリストをかしらとして、キリストに従うのである。教会は、人にたよったり、人に支配されたりしない。教会の中の信任の地位を占めることによって、その人は他の人たちに何を信じさせ、何をさせるかを命令する権威が与えられると主張する人が多い。神はこの主張を是認されない。救い主は、「あなたがたはみな兄弟」であると宣言しておられる(マタイ 23:8)。人はみな試みに会い、誤りを犯しがちである。有限な人間の指導にたよることはできない。信仰の岩は、教会内におけるキリストの生きた存在である。」 2 希望 183

「もしナタナエルがラビの指導を信頼していたら、彼は決してイエスをみいださなかつたであろう。彼は自分で見、自分で判断して、弟子となった。今日偏見にとらわれて恵みから遠ざかっている多くの人々の場合も同じである。もし彼らがきて見さえしたら、その結果はどんなに異なったものになるだろう。人間の権威による指導にたよっているかぎり、だれも救いの知識である真理に到達することができない」 1 希望 159-161

